

(6) 残された問題点

検定牛の厳格な選抜淘汰

間検の成績優良系統の候補牛選抜

5 日本短角種の間接検定

1 背景と特徴

日本短角種の種雄牛（直検済）の子牛を同一飼養条件で肥育し遺伝能力の優れた種雄牛の選抜の資料とする。

2 技枝の内容

(1) 岩栄群

発育良好で伸び深みあり、きこう厚く背腰巾広く中軀の張りよく下腹部充実し上腿厚く内腿充実し腿下りもよい

平均増体量 2932Kg DG 0.952Kg で1Kg増体に要したTDNは732Kgであつた

枝肉重量 3025Kgで脂肪交雑は平均「1.0」となり格付は中4、並2の判定であつた。

(2) 大成群

発育良好で伸びよく体上線平直であるが長肢の感あり、頭は軽く頸はうすい。

平均増体量は2759Kg、DG 0.896Kgで1Kg増体に要したTDNは746Kgであつた

枝肉重量はバラツキが少かつたが284.5Kgとやや小さく、脂肪交雑は平均「0.7」となり格付は中2、並4となつた。

(3) 皇林群

発育良好、伸びはよいが長肢の感あり、平均増体量280Kg DG 0.909Kgで1Kg増体に要したTDNは764Kgとなり、枝肉重量299.7Kg、脂肪交雑は平均「0.5」で格付は並6の判定となつた。

(4) 検定種雄牛の産肉能力等級は岩栄号「B⁺」大成号「B」皇林号「B」の判定となる

3 普及上の留意点

(1) 岩栄群

頭やや重くまた背がややゆるい傾向にある。肘後の充実しないものがある。脂肪交雑はバラツキが見られた。

(2) 大成群

肩端やや開き腹容ややゆるい。脂肪交雑はバラツキが見られた。

(3) 皇林群

肩後、肘後の充実を欠く斜尻の傾向がある

4 成績の概要

(1) 試験課題名 日本短角種の産肉能力検定（間接法）

(2) 試験年次および場所 昭和47～ 岩手県畜産試験場 肉牛部

(3) 試験方法

① 検定種雄牛の概要

	生年月日	産地	父	母	供用地	系 統
岩 栄	4 3 3 1	山形村	松 光(本15)	とちみどり (補岩1356)	岩 泉 町	ホイトラントバンジョー
大 成	4 6 3 1 1	川井村	佐々光(本36)	ほなむら (補岩987)	山 形 村	ホイトデールレディアン クレスト
皇 林	4 5 3 1 1	川井村	岸 林(予岩133)	ほしひめ (予岩464)	肉牛生産公社 滝沢牧場	笹 川

② 調査牛及び検定期間

上記種雄牛の子牛で生後7カ月令、各6頭を1群として20日間の予備飼育後308日間検定を実施した。

③ 飼料は濃厚飼料を体重比1.7%給与、粗飼料は自由採食とした。

(4) 主要成果の具体的データ

表1 増体成績(群6頭平均)

検定牛名	項 目	開始時体重	終了時体重	増 体 量	D G
岩 栄	平 均	239.9 Kg	533.2 Kg	293.22 Kg	0.952 Kg
	S D	13.0	31.4	28.2	0.09
	C V	5.4	5.9	9.6	9.4
大 成	平 均	241.8	517.7	275.9	0.896
	S D	9.4	11.6	8.6	0.03
	C V	3.9	2.2	3.1	3.5
皇 林	平 均	246.9	526.9	280.0	0.909
	S D	13.6	29.5	21.3	0.07
	C V	5.5	5.6	7.6	7.8

(S D 標準変差、C V 変動係数)

表2 飼料摂取量及び養分量(群平均)

項目 検定 牛名	濃 厚 飼 料 Kg	粗 飼 料 Kg		1 日平均摂取量Kg			1 Kg増体に要した飼料及び養分量Kg					
		牧乾草	へい キューブ	濃 厚 飼 料	牧乾草	へい キューブ	濃 厚 飼 料	牧乾草	へい キューブ	D C P	T D N	D M
岩 栄	1986.7	698.9	735.6	6.5	2.3	2.4	6.8	2.4	2.5	1.09	7.32	10.07
大 成	1951.6	609.2	700.3	6.3	2.0	2.3	7.1	2.2	2.5	1.07	7.46	10.23
皇 林	1948.3	743.6	736.2	6.3	2.4	2.4	7.0	2.7	2.6	1.10	7.64	10.60

表3 屠体成績及び産肉能力等級

検定牛名	項目	屠殺前 体重 Kg	冷 屠 体重 Kg	枝 肉 歩 留	ロース芯 の面積 cm ²	脂肪交雜	枝 肉 格 付	能 力 等 級
岩 栄	平 均	490.7	302.5	61.7	29.05	1.0 0.5~1.4	中 4 並 2	B+
	S D	27.9	21.0		2.38			
	C V	% 5.7	6.9		9.9			
大 成	平 均	470.0	284.5	60.5	29.78	0.7 0.4~1.0	中 2 並 4	B
	S D	5.9	6.8		2.09			
	C V	% 1.3	2.4		7.0			
皇 林	平 均	482.7	299.7	62.1	30.75	0.5 0.4~0.7	並 6	B
	S D	26.1	18.4		1.20			
	C V	% 5.4	6.1		3.9			

(5) 残された問題点

- ① 検定種雄牛の選抜淘汰基準の検討
- ② 放牧時における種雄牛の複数混牧の排除
- ③ 供用種雄牛の早期検定実施

6 肉牛肥育経営における規模と生産性

1. 背景と特徴

肉牛肥育経営の専作的拡大は購入飼料の拡大とともに繁殖経営より早いテンポで進行した。しかし飼料の値上り、公害問題また肉価の値下り等で極端な破綻をきたした。正常で高い生産性を期待しつつ経営拡大をはかる指導が必要である。

ここでは規模による生産性の違いを参考に供する。

2. 技術の内容(参考)

(1) 規模別生産性について

規模拡大は段階毎に技術の変更が必要となり、それにともなつた投資が必要である。その場合再生産のルールと規模法則が実現しなければ収益はあがらない。

調査結果では、技術変更の規模段階はⅠ30頭以下、Ⅱ50~70頭Ⅲ100頭以上に区分される。生産性は①労働生産性は規模拡大の効果が現われ拡大とともに生産性の上昇が見られる。②資本生産性はUダウ現象が70頭規模に見られる。したがって技術、投資の規模